

第28回 障害者による書道・写真全国コンテスト 審査総評

書道部門

今年も約800点という多数の出品を頂きました。これは毛筆の活動が日常的に行われている証明でもあります。自由にならない毛筆を自己掌中とする為の努力は大変なことだと思います。それぞれ工夫して紙に表現しております。筆を握れなくても縛り付けて、腕が駄目なら足や口などと体全体を利用して書かれた作品などで、大変高度な完成領域に達しております。「心・技・体」の一体化が見事に審査に大変苦労しました。それだけに賞に入った作品は見応えのある作品ばかりです。今回の特徴としては全体に書的に高度な作が多数を占めておりました。楽しんで書くことにより線の充実度が高まり作品に生气が漲っていました。入賞を逸した作も入賞と甲乙付け難いものばかりです。各地でのリハビリ効果が実を結びつつあるのではと思われました。身体機能の回復を図ると共に、上手に書けた喜びや満足感が一層の目標に向かう力となっていく過程が窺えます。象徴性ある漢字を心で書き次に日常的に使用する文を書くなど、次々と進んでいく喜びの過程が結果的に機能回復に結びついている証拠です。苦労すればする程達成の喜びは大きいと思います。キラキラ輝いている作品群を見ると心の輝きが一番大切だと痛感させられました。見事な作品ばかりです。継続された時間を感じられる作品群です。

渡部 會山 (創玄書道会審査会員、毎日書道展審査会員)

審査員一覧 (敬称略)

渡部 會山 (創玄書道会審査会員、毎日書道展審査会員)

高岩 震 (フリーカメラマン、日本映画撮影監督協会)

写真部門

年々進歩の姿が見られて嬉しい次第です。ひとつはデジタルカメラの発展で写す世界が格段にひろまったこと、そして失敗が少なく、かりに失敗しても気軽に再挑戦できること、また感度が上がって暗いところでも気楽に写せることもあります。

デジタルになって気楽に写す人が増えて質が落ちたとけなす年寄りがいたりしますが、そんなことはありません。コンテストの応募作品の質の向上がその逆を証明しています。

ただひとつ言えることは、写した後、写真屋さん任せにせず、写したときの失敗をパソコンで修正する部分がまだ研究不足だとは言えます。写した時に余分なものが入っていたり、露出に斑があったりしたら、それを修正するのも「現像、プリント技術」の重要な部分だと考えて実行することを勧めます。

写したまま絶対手を触れるなど神がかり的なことをいう人もいますが、いいプリントをつくるのが最終目的ですから、そのための色々な技術を勉強して下さい。

今回驚いたことのひとつは、結構年配の方が、古いフィルムカメラを使っていい作品を出されていることです。そこには長年の技術の蓄積が光を放っています。

デジタルだフィルムだと分け隔てせずに、自分の作品にもっとも適した機材を駆使していい作品をつくる努力をしたいものです。

高岩 震 (フリーカメラマン、日本映画撮影監督協会)